

# 日展ニュース

No. 185

<https://www.nitten.or.jp/>

令和5年9月30日発行

編集兼発行人 神戸峰男

## 第10回日展に向けて



黒川能 森田 茂





## 「第十回日展を開催するにあたって」

日展理事長 宮田 亮平

この度、第十回の大きな節目を迎えることはこの上なき喜びであります。世界的なコロナ蔓延も、その位置付けは五類となりました。皆が触れ合えるイベント等が出来ず、展覧会のみ開催を余儀なくされていたことからの解放感は計り知れないものであります。この時にこそ文化の力、藝術の力、美術の力をもって世にときめきを発信する大きな役割がこの日展にあるのではないのでしょうか。これは百十五年の長きにわたり途切れる

ことの無い日展の行動力により、むしろ人々の生きる力を共通・共有させていただくことかと思えます。

日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五科全てにおいて、渾身の作品を発表するチャンスと、各作家が使命感を持って制作いたしております。必ずやご期待に添える会場になると信じております。

どうぞ皆様の温かいご理解とご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。



第十回日本美術展覧会実施内容

会期 令和5年11月3日（金・祝）～令和5年11月26日（日）  
観覧時間 午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）  
休館日 毎週火曜日  
入場料 ○当日券 一般 一、四〇〇円  
（税込）  
○団体券（予約制）・前売券 一般 一、二〇〇円  
※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。

小・中学生は無料。  
高校・大学生は第十回記念として無料。  
（入口で学生証のご提示をいただきます。）

会場 国立新美術館 東京都港区六本木七―二―二

NITTEN  
日展  
116  
since 1907  
第10回 日本美術展覧会  
日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書  
2023年  
11月3日（金・祝）～26日（日） 火曜日休館 国立新美術館  
◆主催：公益社団法人日展 ◆後援：文化庁／東京都 ◆観覧時間：午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）  
◆入場料：一般1,400円（1,200円）※（1）内は団体20名以上料金。消費税込。 ※特別観覧料として学生・高校生・中学生・小学生・幼児、入館料半額に減額することができます。  
お問い合わせ：03-6812-9921（公開中） ※チケットやイベントなど最新の情報掲載は「日展ウェブサイト」 <https://nitten.or.jp/> でご確認ください。  
The Japan Fine Arts Exhibition

第十回日展 講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ  
・映像による作品解説等を本年度も左記の日程で開催いたします。

（入場無料） 於国立新美術館 三階 講堂 ※変更となる場合があります  
※各日、講堂前にて整理券をお配りします。（30分前）

開催日	講堂でのイベント
11月4日（土）	午後1時30分～3時30分（日本画） ※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者（大臣賞・都知事賞・会員賞・特選） 今年度新人選者 今年度審査員と新人選者による座談会 ―登壇審査員が選定した作品を解説― 今年度審査員
11月10日（金）	午後1時30分～3時30分（彫刻） ※途中10分休憩 「ぶらっと彫刻を楽しむ」 第1部 日展編 第10回日展の見どころ 今年度審査員 第2部 地元で愛される彫刻（西日本編） 田丸 稔・吉居寛子・白石恵里 第3部 彫刻が楽しめる美術館編
11月11日（土）	午後1時00分～2時30分（洋画） 今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新人選者による座談会
11月18日（土）	午後2時00分～3時30分 特別対談 デザイナー コシノジュンコ氏×宮田亮平理事長
11月23日（木・祝）	午後1時30分～3時30分（工芸美術） ※途中10分休憩 シンポジウム「伝承と発信」 今年度審査員
11月25日（土）	午後1時30分～3時30分（書） ※途中10分休憩 シンポジウムによる討論会「日展の書」 森嶋隆鳳・木村通子・綿引滔天・大橋洋之・川合玄鳳 映像による作品解説「書」 松清秀仙・倉橋寄艸・岡野楠亭

「触れる鑑賞」プロジェクト  
日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品（彫刻一部の作品）に触れて鑑賞していただける取り組みを始めました。

# 第十回日展 審査員・係

## 第十回 日展審査員

九五名

審査員長（理事長） 宮田 亮平

## 第一科（日本画） 審査員 一九名

（外部審査員）

国立西洋美術館長 田中 正之  
大阪市立美術館長 内藤 栄

（理事） 福田 千恵 村居 正之  
（会 員） 由里本 出 岸野 圭作

中村 徹 能島 浜江  
松崎 十朗 石原 進  
稲田亜紀子 片山 侑胤  
川嶋 涉 川田 恭子  
中村 文子 藤島 博文  
丸山 勉 南 聡  
（準会員） 青田 賢蔵

## 第二科（洋画） 審査員 一九名

（外部審査員）

大阪市立美術館名誉館長 篠 雅廣  
川崎市岡本太郎美術館長 土方 明司  
武蔵野美術大学客員教授

（理事） 小灘 一紀 湯山 俊久  
（会 員） 高梨 芳実 竹久 秀樹

西田 伸一 西房 浩二  
松田 茂 青島紀三雄  
浅見 文紀 小川 満章  
佐藤 祐治 池上わかな  
阿部 良広 中島 健太  
河本 昭政 本田 年男  
堀 研一

（準会員）

## 第三科（彫刻） 審査員 一九名

（外部審査員）

筑波大学名誉教授 齊藤 泰嘉  
常磐大学特任教授  
多摩美術大学客員教授 武田 厚  
美術評論家

（理事） 能島 征二 山本 眞輔  
（会 員） 竹谷 邦夫 堤 直美

中辻 伸 野間口 泉  
石田 陽介 江藤 望  
河村 佳則 櫻井 眞理  
清家 悟 中村 優子  
堀内 有子  
元田 木山 野添 浩一  
牧田 法子 安田 陽子

（準会員）

## 第四科（工芸美術） 審査員 一九名

（外部審査員）

前東京都庭園美術館副館長 岡部 友子  
東京藝術大学教授 佐藤 道信

（理事） 井隼 慶人 三田村有純  
（会 員） 大樋 年雄 高橋 貞夫

石川 充宏 春日井路子  
志観寺範從 高津 明美  
橋本 昇三 横山喜八郎  
上森 四郎 林 香君  
古瀬 政弘 伯耆 正一  
吉水 絹代 福富 信  
武田 司

（準会員）

## 第五科（書） 審査員 一九名

（外部審査員）

元センチュリーミュージアム館長 神崎 充晴  
大阪市立美術館主任学芸員 弓野 隆之

（副理事長） 黒田 賢一  
（理事） 高木 聖雨 真神 巍堂  
（会 員） 伊藤 仙游 木村 通子

森嶋 隆鳳 吉澤 鐵之  
吉澤 劉石 綿引 滔天  
池田 毓仁 稲村 龍谷  
大橋 洋之 川合 玄鳳  
鈴木 赫鳳 長井 素軒  
藤川 翠香 宮負 丁香

（準会員）

## 第十回 日展《係》

（〇印係主任）

### 第一科（日本画）

由里本 出 〇岸野圭作 中村 徹  
能島浜江 〇松崎十朗 石原 進  
稲田亜紀子 片山侑胤 川嶋 涉  
川田恭子 中村文子 藤島博文  
丸山 勉 南 聡 青田賢蔵

### 第二科（洋画）

高梨芳実 竹久秀樹 〇西田伸一  
西房浩二 松田 茂 青島紀三雄  
浅見文紀 小川満章 佐藤祐治  
阿部良広 池上わかな 河本昭政  
中島健太 堀 研一 本田年男

### 第三科（彫刻）

竹谷邦夫 〇堤 直美 中辻 伸  
石田陽介 〇江藤 望 河村佳則  
櫻井真理 清家 悟 中村優子  
堀内有子 元田木山 野添浩一  
牧田法子 安田陽子

### 第四科（工芸美術）

大樋年雄 高橋貞夫 〇石川充宏  
春日井路子 志観寺範從 高津明美  
橋本昇三 横山喜八郎 上森四郎  
林 香君 古瀬政弘 伯耆正一  
吉水絹代 武田 司 福富 信

### 第五科（書）

〇真神巍堂 伊藤仙游 木村通子  
森嶋隆鳳 吉澤鐵之 吉澤劉石  
綿引滔天 池田毓仁 稲村龍谷  
大橋洋之 川合玄鳳 鈴木赫鳳  
長井素軒 藤川翠香 宮負丁香



## わくわくワークショップ

**対象** 小・中学生とその保護者  
(参加費無料・保護者は入場券を各自用意下さい)

### 実施日程

11月5日・12日・19日(日曜日)  
午前10時30分～日本画・洋画・書  
午後2時～彫刻・工芸美術  
※各教室約2時間

### 申込受付

ハガキかFAXまたはメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門(第2希望まで)を明記の上お申込み下さい。申込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。

(受付締切10/27必着)

**受付人数** 各教室10組(20名程度)

☆日展作家が直接指導します。

☆参加費無料

### 【お申込み・お問合せ】

〒110-0002  
東京都台東区上野桜木2-4-1  
日展事務局展覧会係  
(03-3823-5701)  
(03-3823-0453)  
(FAX) (03-3823-0453)  
(E-mail event@niten.or.jp)

## 第10回日展開催中のイベント

### いっしょに鑑賞会

―出品作家達とゆっくり日展を鑑賞したい方に―  
**開催日程** 11月6日(月)・13日(月)  
・20日(月)

**定員** 各回10～15名

**参加費** 1名 五、五〇〇円

**時間** (入場料、昼食、テキスト他)  
10時30分集合、16時10分解散(昼食つき)

※日本画・書まで、各科の担当作家がご案内します。(主要作品のみ。)

※予約制(詳細は事務局までお問い合わせ下さい。)

### ●作品解説会

### ミニ解説会 《個人の方》

―一人だつて参加したい!―  
出品作家のお話に耳を傾けてみませんか!

**時間** 午後1時30分～(30分程度)

**定員** 各部門20名(5部門)

※参加は無料ですが各自入場券をご用意下さい。

※予約制(当日受付あり)

※土・日・祝・初日・11/10を除く

### 《サークルなどグループの方》

※予約制。事務局までご相談ください。

### 《学校行事、部活動など》

※予約制。事務局までご相談ください。

## 第10回日展行事日程(予定)

### ＝係会関係＝

10月22日(日) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(洋画・工芸美術)

10月23日(月) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(書)

10月26日(木) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(日本画・彫刻)

11月2日(木)

○出陳者内覧会

○大臣賞等受賞者発表

○出陳者懇親会

第1科 KKRホテル東京

第2科 上野精養軒

第3科 リーガロイヤルホテル東京

第4科 東天紅

第5科 ザ・プリンスパークタワー東京

11月3日(金・祝)

○第10回日展開会式

11月16日(木)

○第10回日展授賞式

(国立新美術館講堂)

11月26日(日)

○第10回日展閉会

第10回日展前売券販売店のご案内  
(10月1日より販売)

### プレイガイド

チケットぴあ・CNプレイガイド・ローソンチケット・ファミリーマート店内Famiポート、他  
デパート(友の会)

東武・丸広

カルチャーセンター

読売・日本テレビ文化センター・

ヨークカルチャーセンター、他

他に画材店・画廊・書道用品店などでも取り扱います。

日展公式サイトでも販売しております。

### 《第10回日展チケット情報》

### 前売ペアチケット

通常、一般一枚一、二〇〇円(当日一、四〇〇円)の前売券を、ペアでご購入の場合、二、二〇〇円に。通常の前売券より二〇〇円お得です。

※前売コンピュータチケット・

日展公式サイトのみ

### トワイライトチケット



時間限定の入場券

観覧時間 午後4時～6時

一般一枚 五〇〇円

※第10回記念として、学生(高校生・大学生)は無料。入口で学生証をご提示いただきます。

※会場窓口のみ販売

## 特別寄稿

### 瀬戸内海の陽日に日展を思う

金田 晋

第二次世界大戦は一九四五年八月に終わった。だがその年度内から日展の歴史は始まる。四六年三月第一回展が開催された。これはミラルであった。大戦中文展系洋画界の総帥であった南薫造（一八八三—一九五〇）も東京美術学校油画科教授職を辞して敗戦前年に故郷広島県安浦町に帰っていたが、日展の出発のために命削ってまで力を尽くした。

安浦町を通る、呉線の車窓から見える風景は美しい。一九世紀江戸時代長崎に住んだオランダの軍医シーボルトは江戸参府時の旅日記を残しているが、途上塩飽諸島へ向かう数日の船旅を「もつとも楽しみ多き日々」と回想し、瀬戸内の多島美を絶賛した。明治以降は鉄道沿線からの眺望となったが、絶景たることは変わらなかった。

南の陽光への感性の鋭敏さは生地の風土に由来するものだったろう。イギリスで水彩画の光を学び、つづいてフランス・パリで印象派の光を学んで、日本洋画界の雄となった。その地位をあえて犠牲にして帰郷したのは、当時の東京での生活上の困難避難とは別に、自分の絵画のぎりぎりのところから生き直そうとする決意があったはずである。だがそのかれを待っていたのは軍事機密漏洩防止が理由の瀬戸内海描画の禁止であった。そもそも呉線列車の海側の窓は乗客が外を見ないように遮蔽されていた。

戦後その禁が解かれた。南には潮騒の音が耳に残る光と風と波の風景を思いのたけ描けるこ

とがどれほど嬉しかったか。禁令から解放された瀬戸内海には懐かしい印象派の陽射しが溢れていた。朝早くから海や島に写生に出かけたという。陽光を浴びて生活する家族の日常性がまばゆかった。写生会（中国新聞社主催）を幾度も企画し、市民たちを海や島のスケッチ旅行に連れ出した。帰郷の際持ち帰っていた画材を焼け出された市民たちに惜しげもなく分け与えた。南は日展の第一回（四六年）、第四回（四八年）に審査員を務めたが、その第四回展については翌四九年三月広島巡回展を実現した。日展への広島からの一般応募数は県別で当時全国五指に入っていたという。五〇年一月南逝去。

東京美術学校で南に師事し、帰郷後の南の美術活動を支えつづけた新延輝雄（一九二二—二〇一二）はその遺志をついで戦後の広島美術の再興に尽くした。わたしはかれから「絵の心、絵描きの魂」をよく聞き、広島風の風土と歴史を学んだ。既に老境であり、追憶のやわらかい陽射しの中の街角と老人を描いていたが、恩師譲りの品格あるその描法に崩れるところがなかった。画面に揺らぐ淡い光は瀬戸内海の光に通じていた。

大正から昭和初期にかけて広島市の市民たちは、建物や店構えといい結髪や着付けといい茶菓飲食といい、洋風モダンイズムの漂う都市生活に馴染んでいた。美術に親しむ気風があった。

瀬戸内海安浦の沖合に下蒲刈島が浮かぶ。江戸時代には朝鮮通信使使節団の寄港地で、広島浅野藩のいわば海の迎賓館であった。平成の初め当時の町長竹内弘之は全島庭園化をとえ、この島に能登や瀬戸内各地から何軒もの古民家・茶室を移築し資料館や陶芸館等を開設したが、その中心に純和風建築の蘭島閣美術館をすえた。所蔵品数約二千三百点。個人宅の応接間や座敷に掛けられるスケールの洋画、日本画、版画、染色の秀作を集め、日本近代美術史をた

どれることを特色とする。寺内萬治郎の常設展示館も併設されている。わたしも当初から作品収集、目録作成、展覧会企画に深くかわつた。秋には全国規模の特別展を開催した。展覧会にあわせて高名な作家、評論家の方々に全国からご来島いただき、絵の前で作品の来歴、内容等の解説を受けた。日展系の先生方からも心配りのきいた懇切な解説を受け、そのあと海の見える広い座敷で親しく歓談させていただいた。それがたのしみであった。

瀬戸内海の陽日は日展によく似合う。

金田 晋（かなた すすむ）



一九三八年大阪府生まれ。東京大学文学部美学美術史学科卒業。同大学院美学専攻博士課程単位取得退学。博士（文学、東京大学）。広島大学講師、同総合科学部助教授、教授を経て、東亜大学総合人間・文化学部教授・学部長。

日本現象学会代表委員、美学会委員、広島芸術学会会長、広島県美術館・博物館協議会会長、蘭島閣美術館名誉館長等歴任。

現在、広島大学名誉教授、東亜大学学園理事、東亜大学芸術学部特任教授、同大学院研究科長、ひろしま美術館理事。

第六一回中国文化节賞（二〇〇四年）、広島県教育賞（二〇〇八年）、地域文化功労者（文部科学大臣表彰、二〇一〇年）

著書 絵画美の構造（勁草書房、一九七四年）、芸術作品の現象学（世界書院、一九九〇年）他。

## 日展とA-技術

### 鈴木達也

私が初めて上野の美術展に行ったのは一九五一年、中学生になったばかりの頃だった。当時の上野駅は東北地方への玄関口であり、東北地方からの列車の終着駅でもあった。頭に手ぬぐいを被り、大きな荷物を背負ったモンペ姿の小学生達が東北地方から行商に来ていたし、修学旅行の生徒たちは初めての東京を好奇心満々で見つめていた。

広い公園を歩き美術館に近づくとも木の合間に第七回日本美術展覧会と書かれた看板が目に入った。文展、帝展を経て戦後は日展となり六年経った頃で、父が叔父の絵を見に行こうというのでついて行った。叔父・鈴木満は画家で戦時中は多くの戦争画を描いていた、当時は国の統制で絵画も音楽も自由な表現が許されず、子供心に叔父の絵は暗い軍人たちの絵ばかりと思っていた。戦後しばらく、叔父は我が家の隣に住んでいたこともあり、完成した絵や制作中の絵を覗いたが、「青年士官」（一九四二年、第五回新文展入選）、「武人古老」（一九四三年、第六回新文展特選）、「学徒出陣」（一九四四年、陸軍美術展、情報局賞）など戦争に関係した絵が多く、暗い印象があった。



鈴木 満《裸婦》（昭和26年）

「また暗い絵か」とあまり乗り気もしないまま美術館に入った。ところが展示されていた絵は「裸婦」という題で、新居のアトリエで描いた明るく希望に満ちたものだった。叔父はこういう絵を描きたかったのだろ

うと子供心に納得した。その後も日展に展示した絵は写実的な人物画で明るい絵が多かった。叔父は典型的な古いタイプの画家で、自分の目と筆と感覚だけを頼りに描いていた。例えば四〇〇号「学徒出陣」を油彩で仕上げるのに、

多くの大学を訪ね、制帽や帽章などまで細かくスケッチし、学生を何日もモデルにしてデッサンを重ねている。構図を決める下絵は水彩で、手前の飛行兵の自画像には日本刀を持たせたり、試行錯誤を重ねた末、最終的には卒業証書に替えている。この叔父や叔母（青木純子、示現会創立会員、女流画家協会委員）などは、絵を描くのに写真すら頼らず、ましてやコンピューターなどない時代なので、徹底的に自分の目と感覚を頼りに絵を描き続けていた。当時の多くの画家も同じだったと思う。

音楽の世界でも、生の演奏こそが音楽であると考え、録音したものを良しとしない人たちがいた。再生技術の進歩とウォークマンなどの出現で手軽にどこでも音楽が聴ける時代になっても、生演奏こそ音楽と頑固に主張している人もいる。

コンピューターが音楽の世界にも侵入し、音楽制作そのものにコンピューターが使われるようになった。またCG技術も進歩し、映画やテレビの多くの場面で使われ、利便性と経済的効率面から新技術に依存する人が多くなる中、旧来派はだんだんと少数派になってきた。美術の世界でも同様と思う。

最近のデジタル技術、とりわけAI技術は、生成AIの出現で人間が創造する音楽や美術の世界に遠慮なく入り込んできた。しかも生成AI技術は恐ろしいスピードで高度なものが現れている。アメリカでは生成AIに関する倫理面、著作権、個人情報保護法などの法律問題が議論されていると聞くと、法規制の動きや大統領令発令の動きすらある。

日展でも議論されているかと思う。我々は未知のものには恐怖を覚えがちだが、音楽や美術の面でも今後はうまく活用し、共存することを考えないといけない。従来の価値観では判断できない問題である。

私は今年も新たな会場になった六本木の国立新美術館へ日展を見に行くのを楽しみにしている。作家が生成AIに頼らず、一年かけて制作した力作の中、同じモチーフや画風で描かれた作品と再会すると旧友に会った喜びが湧く。

### 鈴木 達也（すずき たつや）



一九三八年東京都生まれ。慶応義塾大学卒業。一九六二年日本楽器製造株式会社（現ヤマハ株式会社）入社、一九六八年米国現地法人ヤマハ・インターナショナル・コーポレーションへ出向。一九七八年

取締役副社長。一九八四年帰国、ヤマハ株式会社秘書室長。一九八六年財団法人ヤマハ音楽振興会専務理事。一九八九年ヤマハ株式会社取締役、米国本社ヤマハ・コーポレーション・オブ・アメリカへ出向、同代表取締役社長。一九九二年帰国、ヤマハ株式会社顧問。一九九七年スタンウェイ・ジャパン株式会社代表取締役社長、二〇〇八年会長、相談役。スタンウェイ会長など歴任。現在、一般社団法人サポートミュージックソサイエティ理事長、スタンウェイ会最高顧問、学校法人上野学園監事、国際ピアノデュオ協会理事。



## 第十回日展 各科審査員より

日展制作にあたって

由里本 出（第一科 会員・審査員）

京都育ちの私は、祇園祭の『コンチキチン』と、祇園囃子が街に聞こえてくると日展制作の準備にかかります。

今年は、どのように描こうか？あれやこれやと考えることが、作品創りの楽しみでもあり、また、苦しみ

でもあるように思います。毎年、夏の暑い時期から本格的に描き始め、奮闘・努力を重ね、金木犀の咲き薫る頃が近づく作品の終わりが見えてきます。

最終的には、恐れずに新しい自分（作品）を創っていくことが大切であろうと思っております。

本年の審査に当たりましては、創意・工夫の見られる経験豊富な作品、うんうんと唸っている若い人の息遣いが聞こえて来るような力作を期待致しております。



描くということ

稲田亜紀子（第一科 会員・審査員）

この夏、久しぶりに各地のお祭りや花火大会が賑わう様子に、あらためて日本の風土の豊かさを実感しました。

これまで私の日展作品を振り返ると、主な制作時期となった季節の記憶が紐づいていることに気づきます。夕立の音、土の匂い、短い夏を謳歌する蛙や虫たちの声は時に苦しい制作に新鮮な風を運んでくれました。若い頃はなぜ描くのかなど考えもせず、身体で引く線が次第に形を成していく様子を、知らない自分を見るようにで無心になったものです。近頃は描くことそのものが、連綿と続く多様な生命と繋がっており、それがたまたま作品として結実したりしなかったりする波の様なものではないかと思うようになりました。

おそらく多かれ少なかれ、誰にとってもそうしたかけがえのない時間や記憶の集積である一枚の「絵」を、私が審査をするなどおこがましいことですが、作者の息遣いや心の機微を感じ取ることができるように、真摯に作品と向き合い、心を込めて臨みたいと思います。



新審査員として

青田賢蔵（第一科 準会員・審査員）

この度、初めての審査員を拝命し、喜びとともにその重責をいまひしひしと感じています。

今までの審査を受ける側から審査をする側になる戸惑いのなか、作者の感動、情熱を受け止め、慎重かつ謙虚な気持ちで審査に臨みたいと思います。

私は魚の群れを好んで描いてきました。鰯、太刀魚、鮭……。大分県別府の大分マリンパレス水族館で、鰯の群れを見た時の感動は忘れられません。キラキラと光りながら、大きな固まりとなり、一体となり、向きを変え、リズムカルに光の中を泳ぐ小さな鰯の大きな群れ、また鮭も面白く、北海道の千歳川へ何度も足を運びました。川岸にサケのふるさと千歳水族館があり、千歳川を遡上してくる鮭の群れをガラス越しに見ることができるよう。鮭のエネルギーと自然の不思議を感じながらの写生は楽しい時間でした。

これからも自然や周りの事象の不思議、美しさから受ける感動を制作の目標にしていけたらと思います。



## 絵描きとしての連帯

高梨芳実 (第二科 会員・審査員)

ここのところクロッキーに精を出しています。年間一〇〇ポーズを目標にしますので、結構な労力と時間です。

描けば描くほど余計なものは削ぎ落とされて、デッサンは一般教養であり、クロッキーはその髄であると思うようになりました。つまり、単に線による置き換えの度合いが高いために絵画的に見えるだけではないでしょうか。なんとか言語化を進めるためにも、続けてゆきたいと思っています。

今、絵を描く若者が激減している状況です。AIの時代だからではなく、専門家のエネルギーを絵画を掘り下げるより、素人に対するメッセージに向けたために、知的な好奇心がこの分野に欠けて見えるのではないかと思います。

日展審査が始まります。全国から集まる審査員達と、肅々と審査を進めながら、横の連帯を深める場でもあると考えております。



## 初入選の頃

竹久秀樹 (第二科 会員・審査員)

昭和四五年、日展に初入選しました。当時私は、笹岡一先生の画塾で人物デッサンの指導を受けていました。

画塾には篠崎輝夫先生はじめ、多くの先輩がいらして裸婦スケッチ等無我夢中で勉強していました。そういった環境の中で、自然に日展に出品を考えるようになりました。



アトリエが無かった私は、卒業した学校の部屋を使用して頂き制作を始めました。前年の日展は観覧していたものの自分がどの程度のレベルなのかも分からずの出品でした。

当時上野の美術館は旧美術館で階段を上るとエントランスの柱が並び素敵な面持ちでした。若かった私は入選の嬉しさで顔を紅潮させてその階段を踏みしめた記憶があります。

この度、第十回日展審査員委嘱の知らせを受け大変緊張しております。今回も多くの出品者の方々は、それぞれの想いを抱いて出品なさることと考えます。大変な重責と思えます。精神性の高い良い作品が選ばれる鑑審査を誠心誠意務めたいと念じております。

## 第十回日展審査にあたって

河本昭政 (第二科 準会員・審査員)

この度、第十回日展審査員を拝命いたしました。初めての大役に身の引き締まる気持ちで一杯です。

私は大学卒業後約四十年、中学・高校の美術教師をしながら公募展に挑戦を続けて来ました。毎年、上野の杜で行われる展覧会を目標にして、全国各地から集まってくる諸先輩、仲間達の作品から大いなる刺激をもらいながら成長でき、今があると思います。恵まれた環境のなかで絵の道を歩めたことに感謝しありません。長い道のりの中で、私は「自然から学ぶ」を信条として制作してきました。この学びには終わりはありません。これからも、対象と真摯に向き合い、自問自答を繰り返していきたいと思っています。

今回の審査にあたりましては、体調を万全に整え、心に響く作品を選考したいと思えます。出品者の皆様には、持てる力を出し切り、精一杯の制作を期待しております。



## 今日も汗を

石田陽介（第三科 会員・審査員）

記録的猛暑、記録的降水量、近年は異常気象が常とはなっているが、今年の夏の暑さは特別身体にこたえる。私の住む金沢もフェーン現象に伴い連日猛暑と熱帯夜が続いて、まるで体力を一枚また一枚と削ぎ落としていくようだ。彫刻制作は体力が資本のようなもので、さすがにきつい。チェーンソー作業では汗が吹き出る。

この度、三度目の審査員を拝命した。「審査するとは審査されること。」多くの先輩方から異口同音に語られる言葉だ。公募団体展に身を置くと、ともすれば制作がルーティンとなりかねないが、この言葉に触れるたび、身が引き締まる。

「審査する目を自分は持っているのか。審査をするに値する作品を作れているのか。」自問自答は続くが：答えはない。

兎にも角にも全身全霊をかけ作品に向かうしかない。審査を受けられる方々に礼を失せぬよう、その日も思い今日も汗を流す。さてその成果は如何に。審査される日は刻々と近づく。



## 心澄まして

中村優子（第三科 会員・審査員）

彫刻の魅力に惹かれ制作を始めてから十五年が過ぎた頃、ワンピースを着た夏休み中の娘がアトリエの中で遊んでいた。それ



れまでは裸婦像を中心に制作していたが、娘の動きに合わせて動く布の動きや、その下に在る人体の量と動きの変化が面白いと感じ、衣服を纏った彫刻を制作するようになった。ポーズを取るたびに変化する布の動きに目をとられすぎて人体の持つ存在感が失われぬように、服から伸びるしなやかな手足の動きがつながるように、しなやかな体にしなやかな心が宿るように、毎年悪戦苦闘している。

審査にあたり、今制作されている皆さんの様々な変遷や、作品に込めた強い思いは十分に知りえないが、一つ一つの作品を通じ、語りかけてきてくれる作者の思いを、心澄まして、受け止めていきたいと思う。

## 清新な空気を感じて

野添浩一（第三科 準会員・審査員）

去る七月二十九日から七日間、鹿児島では「第四十七回全国高等学校総合文化祭」が行われ、全国各地から芸術や文化活動に力を入れている高校生たちが集結。拠点となった鹿児島市の美術館には高校生の瑞々しい感性の作品が並び、公民館等には洗練とした演奏・歌声が響き渡りました。公民館ホールで限られた時間の中で最終のリハーサル・打合せを行う高校生たちのまさに清新な雰囲気を感じ銘を受けました。

この度、第十回日展におきまして審査の機会を得て、大変光栄です。審査に際しましては、一点一点の作品と丁寧に向き合い、すばらしい力作から清新な空気を感じたいと心から楽しみにしております。その感動を「明日へのエネルギー」にしまりたいと存じます。

この大役に恥じないよう、恩師の教えを礎に、お導きいただきました諸先輩方のご厚情に報い、清廉な審査ができるよう一層の精進を重ねてまいります。





師は樹なり

高橋貞夫 (第四科 会員・審査員)

日本農民美術研究所の創設者である洋画家山本鼎先生の言葉に「自分が直接感じたものが尊い。そこから種々の仕事が生まれてくるものでなければならぬ」との名言があります。

私は農民美術の発祥の地上田市で木彫刻を学び、反り曲がり裂け、固く力はあるが細かい細工のできる樹木の魅力を引き出すための格闘を通して工芸美術の道を歩きました。故郷は屏風のように立つ北アルプスの懷にあり、凜と立つ岳は雄大で堂々たる勇姿に心揺すられたものです。

何度か日展審査員を拝命し、その都度気持ちも新たに審査会に臨みますが、時代の流れによって作品の見方が違うことに気付きます。作品のテーマ、形態、溢れる素材、制作する作家の気持ちもいつの間にか変わっていることに気付きます。人は感動の瞬間に多々立ち合い感性を育み、芸術の道を歩む努力から作品が創られることは変わりませんが、時代の変化は新しい創造を生み進化させて行くのかも知れません。審査の重責にあたり、一作ごとの主張に對峙したいと思います。



第十回日展審査にあたって

— 思うこと —

吉水絹代 (第四科 会員・審査員)

自分の手で創作する手段を探していた二十歳の頃、織に目を向けさせてくださったのは型染の西嶋武司先生でした。私はその素材と技法に興味を湧き、織の作品を創っていかうと決めました。何時もスケッチをされている先生の姿を思い出します。「スケッチはただ描くのではなく、その対象物に向き合って会話をするのが大切」と言われていました。私のモチーフは自然が多いのですが、それは偉大で直ぐには対話になりません。その中に身を置き時間をかけて対話をするのと色々考えさせられて、厳しさや優しさが多くのことを教えてくれます。大きな懷の自然に背中を押されて創作を続けています。

今、戦争や地震、降雨量などによる災害や病など人々が苦しむ厳しい時代です。

各地で苦しむ人たちが多く中で、創作に関わる私たちに出来ることは作品を通して人々に寄り添うことではないかと思えます。各々の作家が創られた感性豊かな作品が、日展の空間に集う人々と共に対話ができる素晴らしい会場になるよう願っています。



日展審査にあたり

福富 信 (第四科 準会員・審査員)

この度、第十回日展の審査員を拝命し、新たな緊張感と共にその責任の重さに身の引き締まる思いです。

陶芸制作を始めて四半世紀が過ぎました。その間に作品及びその時々心の動き(或いは足掻き)がありました。不思議なことに今回審査をする立場になることにより見えてくるものがあるのだと、感じられました。自分自身を含め全体を俯瞰していたつもりでも、一義的に発信する作り手であったが故に見えなくなっていたものがあつたのだと。

日展の工芸美術を見ますと、その多種多様な作品、そしてそれぞれの素材と技法があり、自分の専門以外の分野を同列で判断しなければなりません。初めての審査でもありその難しさは想像に難くありません。出品された方々のそれぞれの想い、個性が造形へと十分に昇華された、心に響く作品を受け止められるよう努めて参りたいと思います。



## 公正な審美眼

森嶋隆風（第五科 会員・審査員）



この度、三回目の審査員拝命の通知を受け、大変感激すると同時に身の引き締まる思いで一杯です。思い返せば、書が好きで大学でも書道を専攻し学びました。各地から集まった仲間と切磋琢磨しながら、いつかは日展に挑戦しようと頑張り、幸いにも四回生の時に仲間三人と初入選を果たす事が出来ました。その感激は今も忘れる事はありません。その後は高校教員として勤務しながらの日展挑戦でした。入落を繰り返しながら特選を連続受賞させて頂き、審査員の道へと導いていただいた事に感謝しながら、自分の作品と向き合っている毎日でです。

各出品者が一年間、構想を練り上げ、精魂込めて修練を重ね、ようやく仕上げた作品を出品するのが日展であり、最高の発表の場であります。それぞれの想いの込められた力作に対し、一点一点に真摯に向き合い、公平で公正な審美眼で鑑審査に臨みたいと思います。

## 線の生命力と存在感

大橋洋之（第五科 準会員・審査員）

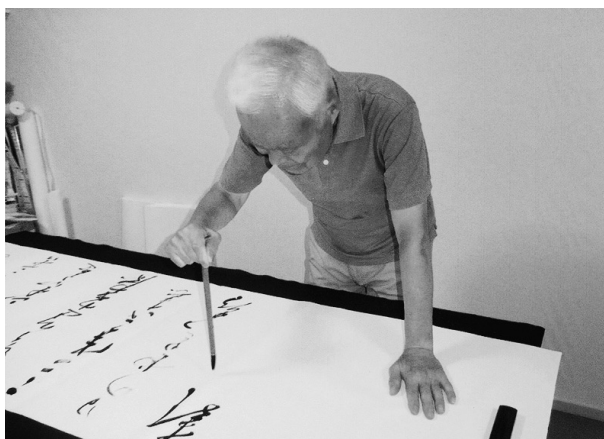
この度、改組以来の節目となる第十回日展審査員の大役を拝命し、光栄であると同時にその重責をひしひしと感じています。

日展は初出品以来の憧れであり書人の戦いの聖地でもあります。また、最高水準の書作品が出品され、作家一人一人が自らの命を削り、自己を投影した作品の集まる場でもあります。師は常々、「書は線の生命力と存在感が大切である」と説いています。私はこの線の力の追求を書作の第一と捉え、日々研鑽を続けています。審査にあたっては、諸先輩方に学びながら、虚心坦懐、先入観を持たず、多様な表現に広く平らかな心を持って臨んで参りたいと思っています。長きに亘ったコロナ禍も、予断は許さぬものの、人々の動きも、停滞していた文化活動も活発になってきました。身を縮めた三年を経て、今こそ大きく伸び上がり、書を通して皆様と共に書の持つ力、そして素晴らしさを発信して参りたいと存じます。



## 真摯な姿勢で

長井素軒（第五科 準会員・審査員）



この度は、日展審査員という大役を仰せつかり、その責任の重さにいたく感じ入っています。

二十歳の時から、日展に出品し始め、結果に一喜一憂しながら、書作に励んで参りました。落選した時も、入選者の作品を見に行くことにより自身の作品の問題点を掘り下げ、反省点を見つけることにより、来年は、ここに陳列されるよう決意を新たにしました。

そして、審査から解放され、ほっとすると、同時に、また別の責任感が芽生え、大きなプレッシャーとなってきました。

出品者個々が一年以上精魂込めた作品を、鑑審査する立場となった今、色々な作品に対して丁寧な審査を心掛け、悔いの残らないように、先輩方から多くを学び、真摯な姿勢で向き合っていきたいと思っています。

「夏休み一日ART体験」

第18回 **ワンデイアート**レポート

連日の猛暑の中、日展会館のイベントスペースで、「第18回 Oneday Art」が開催されました。

昨年は感染者数の急増に伴い、延期を余儀なくされましたが、ようやく通常開催が叶い、大人と子供、あわせて173名の方が参加してくださいました。4年ぶりの作品展も開催することができ、スポットライトを受けて陳列されている自分の作品に、驚きと喜びの参加者の表情が印象的でした。作品展の様子は公式HP（こども日展ページ）でご覧いただけます。また、共同制作は、パブリックスペースや国立新美術館の日展会場で展示を予定しています。

《指導作家》

7月22日 彫刻

吉岡 徹 寺山三佳 堀内有子  
鈴木紹陶武 安田陽子

（オブザーバー） 山田朝彦

（サポーター） 小橋暁子 宮地淑江

（ボランティア） 音羽久美子

7月29日 工芸美術（染）

早瀬郁恵 安藤タツ子 上原利丸  
石原真理 平林芳子 中村美紀  
林 香君

7月30日 日本画

亀山祐介 川田恭子 能島浜江  
岩田壮平

（オブザーバー） 米谷清和  
（サポーター） 野田夕希 安田敦夫  
櫻井伸浩

8月4日 書

井上清雅 綿引滔天 植松龍祥  
岩井秀樹

（オブザーバー） 高木聖雨  
（サポーター） 尾花太虚 齊藤真澄  
角田大壤 滑田耀齋 松浦龍坡

伊能柳華 我妻黄華

8月5日 洋画

田辺知治 桑原富一 佐藤祐治  
星川登美子 田中里奈  
（オブザーバー） 佐藤 哲

《ご協力いただきました》

株式会社栄豊斎、株式会社吉祥、株式会社玉蘭堂、株式会社呉竹、株式会社ケーエス、株式会社光雲堂、株式会社東海丸二陶芸、株式会社平助筆復古堂、株式会社墨運堂



賛助会員制度《日展パートナーズ》  
（掲載希望者のみ 令和5年8月末現在）

●個人

青木晃子様	東 晋一郎様
新井演子様	飯田真未様
石崎國夫様	井谷善恵様
井上道守様	今田功一様
今村忠司様	岩田 薫様
内本久園様	奥田節子様
角井 博様	梶山純子様
兼重勇希様	菊池和久様
栗原直子様	呉 祐輔様
黒田浩平様	児玉安司様
近藤禎男様	坂本美賀子様
佐川かおる様	佐藤大悟様
澤井和行様	瀬川清楓様
高木寛史様	田頭明子様
田頭益美様	高橋千笑様
竹尾明子様	竹本葉子様
田中宏欣様	土橋正彦様
土屋礼央様	寺岡宏高様
中室里恵様	西田俊通様
西村潤帰様	西村友子様
野田裕一様	藤田理恵子様
藤本真之様	堀 稲子様
宮島幸男様	村里 暁様
森寫順子様	吉見次郎様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様	株式会社 靖雅堂夏目美術店様
医療法人社団 永寿会様	株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 玉蘭堂様	謙慎書道会様
ゴールデン文具 株式会社様	公益社団法人 創玄書道会様
株式会社 靖雅堂夏目美術店様	公益社団法人 高山草月堂様
株式会社 筑波銀行様	T&Tパートナーズ法律事務所様
一般社団法人 東光会様	東洋額装 株式会社様
株式会社 西文明堂様	公益社団法人 日本書芸院様
ニューカラー写真印刷 株式会社様	株式会社 原汲古堂様
一般財団法人 ビオトピア財団様	福井素鳳堂様
有限会社 丸栄堂様	有限会社 みなせ筆本舗様
一般財団法人 桃園学園様	株式会社 谷中田美術様
株式会社 リンクス様	株式会社 和光様



## 作家人生―私の仕事―

### 迷路を楽しむ

第五科書 会員 池田桂鳳

七歳の時、近所の人に誘われて行った書塾の先生が日比野五鳳先生でした。それがご縁で知らず識らずの内に書の道に足を踏み入っていました。中学生の時初めて展覧会に出品、それが伊都内親王願文の臨書で初めて触れた古筆でした。その後、王羲之、懷素、空海、藤原佐理等の漢字指導が中心で、仮名を手掛けたのは大学生になってからで最初に受けた指導が伝藤原行成筆の針切の臨書でした。

五鳳先生が重きを置いて指導されたのが線についてでした。紙に食い込む力強い線、妙味ある線など多様な線を表現できる高度な技術を身に付けることが求められました。それと「間」についてでした。「間」は意味あるもので単なる余白ではなく、見る人に何かを語りかけるこの「間」こそが書美に大きく関わってくることを教え込まれました。

書芸術は知性と感性の融合したものです。

両者がバランス良く表現できた時、清らで格調高い書が生まれます。筆は言うことをなかなかきいてくれません。しかし思いもよらず面白い味を出してくれることがあります。

「間」もその時々的心情でさまざまな変化をもたらしてくれます。

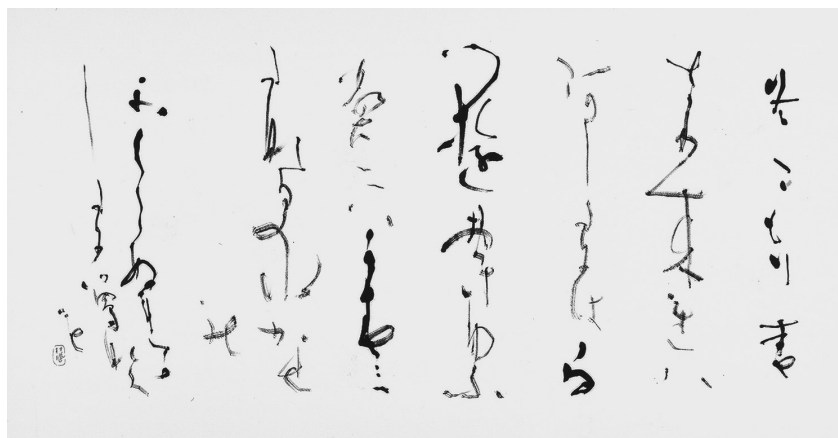
いつでしたか、ある人からこのようなことを言われました。「何と書いてあるのか読めない。作風の好き好きは判断できるが読めると一層興味が持てるのだが」と。

今の社会で変体仮名や草書が使われることは稀で読める人は限られます。読めないと言うこの言葉を聞き捨てることもできません。

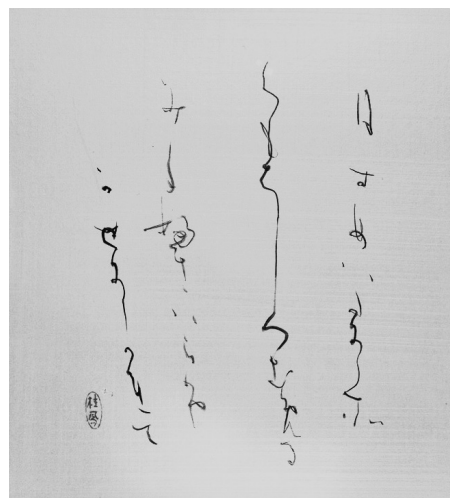
書美については、好きかそうでないか、感動するかしないかで理屈はいらないと思います。

現代に生きる万人の心に心地よい響きを与える書はどのような世界なのか。

伝統美を踏まえながら、また新しい書美の世界を模索するのも遣り甲斐のある道と考えます。



《ふゆごもり》(平成16年 第36回日展出品作) 文部科学大臣賞



《月すめば》(令和5年 米寿記念個展出品作)



《海》(令和5年 米寿記念個展出品作)



復刻

## 巡回展めぐり ―その21―

(神戸会場)

日展神戸展に寄せて

第一科日本画 会員 西 田 眞 人

私が初入選した一九九〇年頃の巡回展は京都、名古屋、大阪など毎年行い開催地を含め約十ヶ所で開催されてきました。現在では、四、五ヶ所での開催となります。改組しながら一一五年続いている日展ですが巡回展の減少は美術界の多様化など社会状況の大きな変化が反映しているのでしょうか。

そんな流れの中、毎年開催していた大阪市立美術館が改修工事に入り三年間使用が不可能と



なりました。そこで浮上したのが五十四年ぶりの神戸での開催です。

会場の美術館は、神戸市の海上に埋め立てて造られた人工の島、六甲アイランドにある神戸ゆかりの美術館と神戸ファッション美術館でした。この島には小磯記念美術館、芸術系コースのある六甲アイランド高校などもあり、島内の至る所に神戸市主催の野外彫刻コンクールで買上げた彫刻などが四十体ほど設置されています。ファッション美術館三階にある図書館は国内外のファッション、美術など四万冊の蔵書があり自由に閲覧できます。一日アートの浸れる六甲アートランドとも言える場所での日展開催でした。

またコロナ禍で三年間中止の懇親会が神戸では美術館隣のホテルにて久々に開催され、出品者にすれば色々と新鮮な日展神戸展となりました。

神戸市の全面的な協力もあり入場者数は東京展に次いで多い四万四千を超えました。島に至るメインの交通としては六甲ライナー（無人運転の新交通システム）に乗って窓外に港や



海鳥を横目に潮風を感じながらの港町神戸らしい展覧会場でした。会場は二つの美術館とは言えもともと一つの施設として建設されたモダンな美術館。そこでの展示は、従来の大阪展で見た印象とは異なり、出品者にとっても新鮮でした。六甲ライナーの駅構内は日展のポスターで真っ赤となり、会場近辺の遊歩道一キロほどは日展の真っ赤なバナーが並びます。この赤いバナーは今も掲げられており二〇二五年までは赤い「日展」の文字が美術館近辺では並び島内の人々は毎日見ることとなります。日展会期中に全科の地元作家でワークショップを開催し市民との交歓も計り、日展会場近辺の賑わい創出に積極的に協力しました。

現代美術一辺倒になりがちな自治体などの催しに公募展の「日展」が街の活性化、魅力化に貢献する成功例となり他府県でも開催要請の声が高まればと思います。この日展神戸展を盛況な催しとして継続してゆくにはもう一人増の入館者が必要です。来年二〇二四年神戸展ではさらなる入館者増となりますよう知人の方々に声をかけをお願いする次第です。



## 刊行物のご案内

### 第10回日展作品集

- 定価 三、四〇〇円（税込）
- 令和5年11月3日発行予定
- 五部門の全会員・審査員・受賞者の作品図版
- 別冊 作家本人による作品解説、釈文（書）
- 諸資料
- A4判変型
- オールカラー 約一六〇頁
- 表紙 福田千恵・佐藤 哲・宮瀬富之・奥田小由女・星 弘道（出品作・予定）

### 第10回日展図録

（五部門五分冊）

- 定価 各三、四〇〇円（税込）
- 令和5年11月8日発行予定
- 東京会場の全陳列作品図版・目錄を収録
- （作家名・作品題名の読み仮名付）
- 全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記
- 審査所感、授賞理由ほか諸資料
- A4判変型

### 第一科『日展の日本画』

- オールカラー 約六五頁
- 表紙 福田千恵（出品作・予定）

### 第二科『日展の洋画』

- オールカラー 約一四〇頁
- 表紙 佐藤 哲（出品作・予定）

### 第三科『日展の彫刻』

- オールカラー 約六〇頁
- 表紙 宮瀬富之（出品作・予定）

### 第四科『日展の工芸美術』

- オールカラー 約一二〇頁
- 表紙 奥田小由女（出品作・予定）

### 第五科『日展の書』

- 全会員・審査員・篆刻はカラー、準会員・無鑑査・特選・一般入選はモノクロ 約二二〇頁
- 表紙 星 弘道（出品作・予定）

※ご注文方法等、詳細はホームページにてお知らせします。

表紙

「黒川能」

一九六九年（昭和四十四年）

改組第一回日展

F80・油彩

森田 茂

（一九〇七（二〇〇九）

日展史第三十二巻掲載

日本芸術院蔵

文化庁許可済

左の先生方が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

## 編集後記

今夏は、全国的に記録的な猛暑となり、また台風や大雨による自然災害も多く、新型コロナウィルスの五類移行後も気の抜けない状況が続いています。

今号は特別寄稿として二名の方に日展に対する思いをそれぞれの視点から述べていただきました。「作家人生―私の仕事―」では書の部門から書の線や間についての貴重な考えを語っていただきました。

また「巡回展巡り」シリーズを復活し、神戸会場の取り組みと今後の課題を掲載しました。会場近辺の日展の赤いバナーは印象的でした。

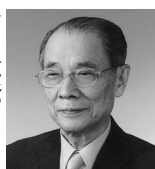
第十回日展の審査員が決まり、初めて審査員を務める方を含めて各科三名ずつ、鑑審査に臨む姿勢、制作において重視している点などを書いていただきました。

秋の日展が近づいてきました。十回展として節目の年です。日展のさらなる発展を祈念いたします。

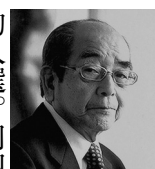
（上原）

編集委員

亀山 祐介 西田 真人  
浅見 文紀 前原 喜好  
野原 昌代 堀内 秀雄  
上原 利丸 村田 好謙  
歳森 芳樹 福光 幽石



吉村 年代先生（巨画・会） 5.7.7  
浅見 嘉正先生（洋画・会） 5.8.16  
日比野光鳳先生（書・顧問） 5.8.23  
（日本芸術院会員）  
九十四歳。昭和三年  
京都市生まれ。昭和  
四十二年第十回日展  
初入選。同五十九年日展会員、平  
成四年日展評議員、同十一年日展  
理事、同十四年日展常務理事、同  
十六年日展理事、同十八年日展常  
務理事、同二十年日展理事、日本  
芸術院会員、同二十一年日展顧問、  
同二十三年文化功労者、令和三年  
旭日中綬章受章。昭和五十八年第  
十五回日展審査員（以降合計九回）。  
池山 阿有先生（洋画・会） 5.9.9



澤野 慎平先生（巨画・会） 5.6.29  
横山 豊介先生（彫刻・会） 5.7.1  
伊藤 裕司先生（工芸・書） 5.7.6  
（日本芸術院会員）  
九十二歳。昭和五年  
京都市生まれ。昭和  
二十八年第九回日展  
初入選。同四十八年日展会員、平  
成九年日展評議員、同十六年日展  
理事、同十八年旭日中綬章受章、同  
二十三年日展参事、日本芸術院会  
員、同二十四年日展顧問。昭和四  
十七年第四回日展審査員（以降合  
計五回）。